



▲近所の方に本場韓国キムチの作り方を教える北山さん

▼講習会でフォルクローレの手ほどきをするゲバラさん



もっとコミュニケーションの輪を広げたい

坂さんは話します。

中央アメリカのホンデユラス共和国出身のフェリックス・ゲバラさんは、中米諸国でのNGO（非営利法人）の平和活動をしていた奥さんと知り合い、4年前に来日。結婚後、現在は、奥さんの父が経営する塗装会社の社員として働いています。



フェリックス・ゲバラさん

ホンデユラスでは、休日、公園にたくさんの人びとが集い、フォルクローレ（南米の民族音楽）やサルサという舞踊を楽しむ習慣があります。この中南米の文化を多くの人に知ってもらおうと、ゲバラさんは、楽器や踊り、スペイン語などの講習会やコンサートを開くなどの活動をしています。

しかし、自分の国の文化を日本人に伝えるには、まだ、自らの日本語が十分ではないと考えています。

「初対面の方と話すのは、ちょっと、気が引けることもあります。それでも勇気を出して、自分の知っている日本語で積極的に言葉を交わすようにしています。そうしないと何も始まりませんから。もっと日本語を勉強して地域

の人たちとのコミュニケーションの輪を広げたい。そして、近い将来、市内の公園でラテンの音楽を演奏し、登別のみなさんとサルサを踊れるようになったら最高ですね」とゲバラさんは夢を語ります。

登別の人はとても親切 自然も豊か

韓国の釜山市出身の北山永愛さんは、昭和57年にデザインを学ぶために来日。東京でご主人と出会い結婚し、7年前にご主人の仕事の都合で登別に来まし。現在は、専業主婦。



北山永愛さん

北山さんは、日本語はとても難しいと言います。「例えば、日本以外ではストレートに『出来ません』と話す言葉が、日本では『ちょっと無理ですね』などと相手を思いやる優しい気持ちが含まれた表現をすることが多いので、戸惑いもありました。そんな中で、いつも私自信心掛けていることは、素直な気持ちで話すということです。そうすれば話せばどんな人とも分かり合えると思っています」と話します。

「初めて登別に来たころ、人に道を尋ねたとき、言葉が良く通じなかったら近くまでわざわざ案内してくれたり、

風邪で寝込んだときには、近所の人がお粥を作ってくれたり、雪道で買い物に滑ってころんだときに『おばさん大丈夫』と小学生が声を掛けながら落ちた物を拾ってくれ、何事もなかったように行ってしまったことなど、このまちの人たちの温かい気持がとても好きになりました。登別は自然も豊かで、風景もすばらしいですね」と話す北山さんは、暇を見てはご主人と2人で夏のカムイヌプリの溪流や冬の海岸線の散策を楽しんでいます。

肩の力を抜いて 自然体で接することが大切

言語や習慣の違いから体験しさまざまな気苦労を明るく過去のこととして気さくに話す3人の方たち。

もちろん自らの民族としての誇りを大切にしながら、日本の文化や習慣を学び、一生懸命になじもうと努力しています。そして、縁あって結ばれた方と同じ気持ちでこの登別を愛しているのがわかります。

私たちは外国の方に接したとき、妙にへりくだったり、いただけかな気持ちになつたり、あるいは、敬遠するといったことがないでしょうか。

このレポートを通して、「自然体で」、「勇気を出して交流を」、「素直な気持で」といったように、肌の色や人種、国籍の違いを乗り越えて、同じまちに住む者同士として、肩の力を抜いて自然体で接することが、最も大切なことだと感じました。